

目次	1	SciREXサマーキャンプレポート [石黒未有]
	2	公開シンポジウム「いま、生まれ変わる医療計画～地域医療の最適化へ、実効性を得るために～」 [埴岡健一]
	3	学生インタビュー [櫻井優一さん]
	4	GraSPPへ、SIPAへ、さらに外へ [本間奈菜] / トピックス

## SciREXサマーキャンプレポート

石黒未有 法政策コース1年

8月31日から9月2日にかけて2泊3日のSciREXサマーキャンプに参加しました。今年は淡路島で行なわれ、「人口減少社会」をテーマに30年後の未来予想図と未来理想図を班ごとに描いて、理想実現のための政策提言をするという形で進みました。

### ●出発前夜まで

現地では顔を揃える前に、班ごとに自己紹介や事前課題を行ないました。班の構成は、科学哲学や農学など専攻もバラバラ、経歴も社会人経験ありから2度目の修士まで多種多様でした。メンバーのバックグラウンドがバラバラなことに異文化交流の面白さを感じつつも、上手くひとつの提言に纏められるだろうか…とも思いました。メールではあまり活発に話し合うことが出来ず、しっかりと準備ができていない状況で当日を迎えたこともあって、不安の残る中での参加になりました。

### ●現地にて

サマーキャンプはグループワークを中心に進みました。私たちの班は事前準備の遅れを取り戻すところからのスタートです。しかし実際に顔を合わせてしまえば、話し合いはスムーズに進んでいきました。班長がしっかりと時間を管理してくれたことや、お互いあまり専門に拘らず話し合えたことが大きかったように思います。公衆衛生が専門のメンバーは、事前準備では自分の専門領域から見た30年後の予想図を描いていましたが、現地では医療・公衆衛生のこ



とは自分から知見を提供できるけれど、それ以外では知らないことが多いので皆の話を聞いて考えたいという姿勢でした。そのような話が早くから出ていたこともあって、お互いの差異を尊重しつつの議論になりました。その中で、普段は自分の専門領域のフレームで社会や政策を見ているけれど、他の視点からはそれがどう見えているかが感じ取れるところに面白さを感じました。ロケットを開発する側から見た法律の話などを聞くと、普段自分が学んでいるのとは違う法律の姿が見えるようでした。

### ●サマーキャンプを終えて

グループ発表での先生方からの厳しい指摘もあり、自分の勉強不足を痛感したサマーキャンプでした。特に、政策を実行したからといって自身の意図した素晴らしい結果がすぐさま出るというわけではないという指摘は、文字に起こすと当たり前ののですが、サマーキャンプでのグループワークではつい忘れがちでした。しかし、グループワーク、そしてそれ以外の時間を通じて専門の異なるメンバー、他大学の先生方など普段交流の機会のない方々と接し、異文化交流ができたことは月並みな表現になりますがよい経験となったと思います。

「なんで自分のフィールドはこれって決めてしまうんだろうね」お話をする機会のあった先生がこのようにおっしゃっていたのが印象に残っています。これを機に、他のフィールドに自分の世界を開く姿勢を持てればと思います。



## 公開シンポジウム

# いま、生まれ変わる医療計画 ～地域医療の最適化へ、実効性を得るために～

埴岡健一 特任教授

2014年10月12日と13日の2日間にわたって、標記のシンポジウムを開催しました。医療政策教育・研究ユニット(HPU)の社会活動として年に1回開催しているもので、本年が4回目となります。今回は、あるべき地域医療計画の姿を検討している有志の会「地域医療計画実践コミュニティ(RH-PAC)」の協力を得て開催いたしました。台風が近づくあいにくの天候でしたが、政策立案者、患者・住民、医療提供者、メディアなど多様な方々、約280人(1日目160人、2日目120人)にご来場いただきました。医療計画策定に携わる行政の担当者が14県から21人参加されたことが特筆されます。

いま、地域医療計画の領域が大きな脚光を浴びています。2013年8月の「社会保障制度改革国民会議報告書」を受けて、さまざまな制度的手当てが進められています。どのように病床を再配置するかを決める基礎となる「病床機能報告制度」が動きはじめました。地域の医療提供体制を再構築する青写真とも言える「地域医療構想」を、各当道府県が来年度に策定することになっています。そのためのガイドラインを現在、厚生労働省が策定中です。消費税を財源とした「地域医療介護総合確保基金」(約900億円)も用意されました。こうした環境の整備から、従来は「絵に描いた餅」と呼ばれがちであった医療計画が、地域医療を改革するための実効性を持つようになるのではないかと期待が高まっているのです。

シンポジウムは、「講演」「RH-PACによる医療計画ガイドラインの発表」「パネルディスカッション」の3部構成でした。

講演部分では、まず、厚生労働省審議官(医療介護連携担当)の吉田学さんが、「2025年への戦略を鳥瞰する」として、超高齢化社会に適應するグランドデザインを示しました。次に、厚生労働省医政局地域医療計画課長の北波孝さんが「地域医療計画を巡る動向」として、具体的な諸政策を説明しました。さらに、日経ヘルスケア編集委員の庄子育子さんが「いま、なぜ地域医療計画なのか」との演題で、着目すべき点を解説しました。3つの講演により、医療計画が日本の医療提供体制再構築のカギとなっていることが明らかになったと思います。

引き続き、RH-PACが作成した「地域医療ビジョン/地域医療計画ガイドライン(暫定版)(以下、RH-PACガイドライン)」がパート別に紹介されました。同ガイドラインは、「策定基本ガイドライン」「策定プロセスガイドライン」「策定参画者研修ガイドライン」の3本の基本ガイドライン、「PDCAサイクルと指標」「機能分化と連携」



台風が近づく中の開催になりましたが2日間で約280人にご来場いただきました

の2本のテーマ別ガイドライン、「がん」「脳卒中」「急性心筋梗塞」「糖尿病」「精神疾患」「救急医療」「災害医療」「へき地医療」「周産期医療」「小児医療」「在宅医療」の11本の疾病・事業別のガイドラインの合計16本から構成されます。会場では、合計約300ページのガイドライン冊子が回覧されました。

本ガイドラインの狙いは、(1)行政のみならず、地域の患者・住民も含めて多様な立場の人が参画して計画を策定できるようにする(2)国のガイドラインでは盛り込めないような実用的なノウハウや施策案を盛り込む——などにより、地域の計画策定力を高め、ひいては地域医療体制を最適化することです。都道府県アンケートを実施し(36県が回答)、その回答にあった現状、意見、ニーズも踏まえて策定されています。

RH-PACは、患者・住民関係者、医療政策立案者、医療提供者、メディアなど約100人からなる有志の集まりです。昨年の9月に開催した第3回公開シンポジウム「2025年に向けた医療計画と診療報酬の姿」の際のご来場者向けアンケートで「医療計画の勉強会があれば参加したい」という項目を作ったところ、多数の方が参加意向を表明されました。それを受けて、今年4月に結成されたものです。HPUが実施している社会人人材養成講座である「医療政策実践コミュニティ(H-PAC)」、その前身である東京大学「医療政策人材養成講座(HSP)」のメンバーも多数参加しています。4月から17回の勉強会を開催し、テーマごとに13の分科会を置き、検討を重ねてきました。

最後のパネルディスカッションでは、「2018年までのロードマップ～いま私たちに何ができるか～」とのテーマで、国、都道府県、患者・住民、保険者、医療提供者、メディアなど異なる立場のパネリストが同じ目標に向かってどのように取り組むか、活発な議論が展開されました。

プログラム、当日のスライド、RH-PACガイドライン(暫定版)は、医療政策教育・研究ユニットのウェブサイトからご覧になれます。

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/HPU/>

詳細なレポートも11月下旬に掲載する予定です。



パネルディスカッションでは、来場者とのやり取りも含めて活発な議論が展開されました



# Student Interview



塾の社員の方の送別ビデオレター用に  
アルバイト仲間と人間ピラミッド

## 学生インタビュー

第19回

櫻井優一さん  
経済政策コース2年

### — GraSPP で学ぶに至るまでの道のりを教えてください。

話せば長くなります。生まれ育ちは足立区です。中学生当時は学級崩壊もあり、僕は勉強したいのに周りのせいで勉強できないのは納得いかないよな、とずっと思っていました。うちは母子家庭で、金銭的に豊かではないために塾に行けず、勉強の場が学校だけだったので、なおさらです。問題には感じていたのですが、周りに注意する勇氣はありませんでした。協調性がなくて「易きに流れる」にならなかったのは不幸中の幸いでした(笑)。

高校は地元の都立で進学校でもなかったので、やはり多少問題はありました。人に勝てるものは勉強だけだったので、大学には絶対行くと心に決めていました。志が同じ人が多い場所に行きたかったんです。高校2年生くらいまでは東大受験もちらりと考えましたが、高校が進学校ではなく、予備校に行く余裕もなかったので、私立に方向転換して上智大学経済学部に入りました。

母の苦勞を知っているので学費を出してほしいと言えず、大学3年前半までは読売新聞の奨学生でした。各新聞で奨学生を募集していますが、奨学金の額と月々の支給額が多かったが日経と読売で、読売を選びました。担当地区は上野界限で、湯島辺りまで朝夕刊配達していました。朝は1時半か2時に起き、夜は8時か9時に寝るという生活です。試験のときは夜10時か11時まで勉強してから寝るのですが、さすがに体力的にきつかったです。雨の日にバイクで転倒し、新聞を地面に全部ぶちまけてしまったこともあります。その後は母が学費を出してくれたりしたので、新聞奨学生を卒業できました。このときの経験から、「自分を裏切らない、お世話になった人を裏切らない」が信条になっています。

このような事情のため、学部時代には思ったように自分の関心領域を納得いくまで勉強することが難しい状況でした。そこで、大学院に進学して、経済学とその活用方法をさらに掘り下げたいと考えました。

### — 就職は決まりましたか？

ベネッセに決まりました。第一志望だったので心の底から喜んでます。教育を通じて「よく生きる」という社是を実現しようとする姿勢に共感しました。さまざまな環境の子供たちが未来への希望をもてるよう、教育を通じて貢献したいと考えています。希望している仕事の内容だと、おそらく初めは東京ではなく地方配属になるのではないか、と思っています。会社から行けと言われてから、山奥でも海外でも行きます！

(インタビュー・文責 編集担当)



アルバイト先の塾の仲間とバーベキュー

# GraSPPへ、SIPAへ、さらに外へ

本間奈菜 2014年度MPP/IP修了



卒業し、再び社会人となって2ヶ月弱。改めて振り返ると、2年間の学生生活はなんと贅沢な時間であったろうと思います。

私はMPP/IP 3期生としてGraSPPに入学し、2年次はダブルディグリー制度でコロンビア大学国際公共政策大学院(SIPA)へ留学しました。SIPAとGraSPPには、それぞれ違った素晴らしさがあります。たとえば、SIPAは一学年に約500人もを抱えているため、クラスメートのバックグラウンドも考え方も多様で、議論は刺激的です。こぢんまりしたGraSPPでは対照的に、いくつもの課題と試験を共に乗り越える「戦友」ができます。GraSPPで得た友人は一生ものだと思っています。

ただ、なにかとことん追究したいテーマがあるのなら、どちらの学校であっても、与えられた枠組みの中にいるだけでは不十分かもしれません。私が2年間を通して得たもののひとつは、今いる環境の良い点を吸収しつつ、それ以上を求めて外に飛び出していく姿勢だったように思います。たとえば1年次には経済学やマネジメントの授業に加えて駒場キャンパスへ工学部の授業を受けに行っていましたし、SIPAへ留学したのも、入学当初から学修テーマと決めていた開発と防災の両立という問題をより深く学ぶためでした。SIPAに行ってから、フィールドワークや現地取材が中心の授業に挑戦しました。正直言って、英語がうまければもっといろいろできたのに、と悔しさは残りますが、これらを通して聞いた鮮烈な社会の生の声は教室では絶対得られないものでした。

冒頭に贅沢と書いたのは、学生のあいだはどんなアプローチもとるのも自由だからです。ぜひGraSPPだけでなく、東大全体や、さらにその外まで、学修の可能性を広げてみてください。

私は今、空間情報を扱う日本の民間企業の国際部門に勤めています。かなり大きさに言うと、開発途上国の防災・都市計画や開発政策を精確な国土の把握という土台から支える仕事です。まだまだ知識不足で日々勉強ですが、今のところ、とてもやりがいを感じています。

## TOPICS トピックス

10月初旬にアジア各国から76チームが参加した即興型英語ディベートのアジア大会で、GraSPPの学生である加藤彰と吉丸一成が、日本人で初めてベスト16にランクインしました。即興型英語ディベートは、議題を与えられ、15分の準備ののちに第三者の審査員を英語で説得する競技で、世界中で盛んに行われています。肯定側・否定側は自動的に割り振られ、様々な視点で考え、発言することが求められます。今回の大会でも「国際スポーツ大会における選手の政治的・宗教的発言の是非」、「香港における学生デモの是非」、「ファタハがアメリカやイスラエルと協力することの是非」等が議論されました。

国際公共政策コース2年 加藤 彰/吉丸一成



編集  
後記

今回インタビューした櫻井さんは、もはや死語となりそうな「苦学生」です。環境のハンデをものともしないどころかバネにしてGraSPPで学ぶに至った話を聞いていて、ハンデをはね返すことができる人とできない人の違いはどこにあるのかを考えていました。本人のモチベーションもあるでしょうが、そのモチベーションの原動力となる環境、人物の存在も侮れないのではないかと考えています。"Nature versus nurture"という表現があります。環境は変えられます。(編集担当)

NEWSLETTER [編集・発行] …… 東京大学公共政策大学院  
第38号  
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[発行日] …… 2014年11月7日

[デザイン] …… 安孫子正浩(水蒸気図案室)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 tel 03-5841-1710 fax 03-5841-7877  
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp>